

アブラハムの物語 (2)

アブラハムとサラ、またその一族は、神の言葉に従って長い旅をし、今は外国人に囲まれて、カナンカナンの地、ヘブロンヘブロン近郊のマムレマムレの櫨榲桲の木の木のそばに天幕を張って住んでいます。神の祝福の約束を受けたものの、現実には子どもは与えられず、不安と緊張の中で過ごす日々でした。しかし主はついに沈黙を破ってアブラハムに語りかけ、子どもと子孫を与える約束を確認して彼を励まされました。彼は主に促されて天幕の外に出、満天の星を仰ぎました。

「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」(創世記 15:6) と記されています。これは新約聖書にも何度か引用される重要な言葉です (ローマ 4:3 ほか)。

アブラハムは再び口を開いて語ります。

燃える松明

主はわたしに言われました。

「私はこの地をあなたに与えて、それを継がせるために、あなたをカルデアのウルから連れ出した主である。」 創世記 15:8

そう言われて、これまでの長い曲折の中にも主の導きがあったと思うと、心にしみるものがありました。けれどもなお約束の確かさがほしくて、わたしは尋ねました。

「主なる神よ、私がそれを継ぐことをどのようにして知ることができるでしょうか。」
わたしは主にしるしを求めたのです。すると主は答えてこう言われました。

「三歳の若い雌牛、三歳の雌山羊、三歳の雄羊、それに山鳩と鳩の雛を私のもとに持って来なさい。」

わたしはその意味を理解しました。主は、契約の儀式の準備をするように言われたのだと。わたしは、それらの動物をみな持って来て、真ん中で二つに切り裂き、切り裂いたものを互いに向かい合わせに置きました。動物を二つに切り裂いて、両側に置き、その間を当事者が通る——これが契約の儀式です。もし契約を破れば、この動物のように自分の身が二つに切り裂かれてよい。そういう意味をこめてこれを行うのです。主なる神は、人間社会の方式を用いてわたしとの間に契約を行い、ご自分の命をかけてその約束を保証しよ

うとしておられる。わたしも自分の命をかけて主を信じようと決意しました。

ところが動物を用意して数時間、主の次の指示をじっと待っていましたが、何も起こりません。禿鷹が動物の死体を狙って舞い降りてきます。大切なものを食い荒らされないように、わたしは棒を持ってそれを追い払いました。長時間これが続けたのですっかり疲れてしまいました。

日が沈みかけた頃、わたしは深い眠りに落ちました。そのとき、わたしは恐怖に襲われ、深い闇に閉ざされました。すると主の言葉が聞こえました。

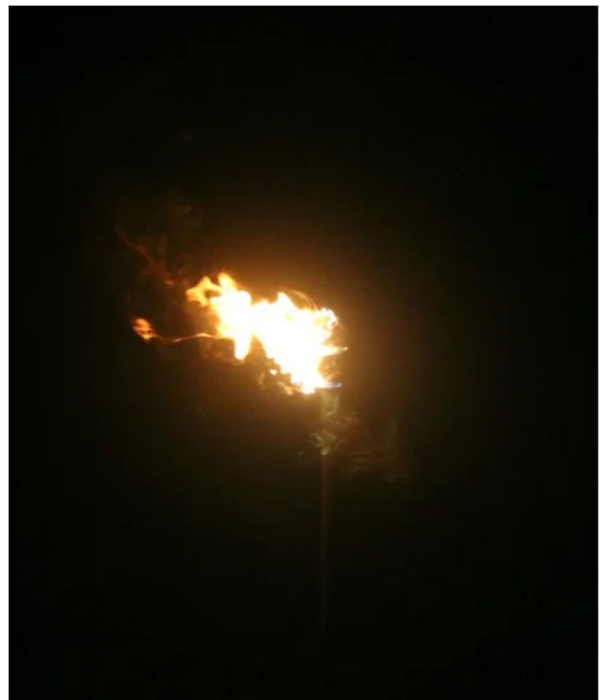
「あなたの子孫は、異国の地で寄留者となり、四百年の間、奴隷として仕え、苦しめられる。しかし、あなたの子孫を奴隷にするその国民を、私は裁く。……あなた自身は良き晩年を迎えて葬られ、安らかに先祖のもとに行く。」 15:13-15

日が沈み、暗くなった頃です。わたしは眠っているのか覚めているのか自分でもよくわからなかったのですが、煙を吐く炉と燃える松明が、あの裂かれた動物の間を通り過ぎて行くのを見ました。主の臨在の恐れと深い感動が全身を包みみました。

主は、契約の当事者として、裂かれた動物の間を通り、みずからの命をかけて約束を保証されました。けれども主は、わたしには動物の間を通ることをさせられませんでした。これは主の愛の配慮だったと思います。主はわたしの弱さをご存じであり、わたしがたやすく信仰の決意に背くことがあるのを知っておられた。主がすべての責任を引き受けてくださったのです。

こうして主はわたしとの間に契約を結び、わたしと子孫を保護し導くことを誓われました。わたしも精一杯、信仰をもって主に仕えることを誓いました。

あの燃える松明は、どのような時にもわたしたちを守ろうとされる神の愛の炎だったと思います。



ハガルとイシュマエル

主は「あなた自身から生まれる者が跡を継ぐ」（15:4）と言われたのですが、妻サライには子どもが生まれませんでした。彼女には、ハガルという名前のエジプト人の女奴隷がいました。サライはわたしに言いました。

「主は私に子どもを授けてくださいません。どうか私の女奴隷のところに入ってください。そうすれば私は彼女によって子どもを持つことができるかもしれません。」16:2

わたしはサライの願いを受け入れました。やがてハガルは身ごもりました。こういう仕方では主の約束は実現するのでしょうか。

ところがサライはわたしに訴えるようになりました。ハガルが自分を見下す、と。サライの屈辱感と怒りがあまりに激しいので、わたしは「女奴隷はあなたのものだ。好きなようにするがよい」と言いました。サライはハガルにつらく当たったので、ハガルはサライのもとから逃げ、家を出てしまいました。

この時ほど自分の無力を感じたことはありません。自分は大きな集団を率いる族長であるのに、どうしていいかわからないのです。サライの気持ちを無視することはできず、「好きなようにせよ」と言ったのですが、出て行ったハガルとそのお腹の子のことがとても心配でした。祈るしかありません。

ハガルは戻って来ました。詳しいことはわかりませんが、ハガルが神との出会いを経験したことは明らかでした（創世記第16章）。

やがてハガルは男の子を産みました。わたしはその子を「イシュマエル」と名付けました。「神は聞かれた」という意味です。その時、わたしは86歳でした。

イサク誕生の約束

それから10数年して、主はわたしに現れて言われました。

「私は全能の神である。私の前に歩み、全き者でありなさい。そうすれば、私はあなたと契約を結び、あなたを大いに増やす。」17:1-2

主はわたしの名「アブラム」を変えて「アブラハム」とするように、また妻の名「サライ」を変えて「サラ」とするように命じられました。そしてこう言われたのです。

「私は彼女を祝福し、彼女によって、あなたに男の子を与える。私は彼女を祝福し、彼

女は諸国民の母となる。……その子をイサクと名付けなさい。」 17:16、19

ある夏の日のことです。昼の暑い頃、わたしは天幕の入り口に座っていました。ふと目を上げると、3人の人が近くに立っていました。旅人のようです。わたしは走り出て言いました。

「どうか僕のところを通り過ぎて行かないでください。水を少しばかり持って来させますから、足を洗って、木陰でお休みください。またパンを幾らか持って来ますので、元氣をつけ、それからまたお出かけください。せつかく僕の近くを通られたのですから。」

18:4-5

わたしとサラは急いで料理を用意し、旅人をもてなしました。やがてその一人がこう言いました。

「私は必ず来年の今頃、あなたのところに戻って来ます。その時、あなたの妻のサラには男の子が生まれているでしょう。」 18:10



心に苦笑が起きました。すでに

年老いてしまったわたしたち夫婦に子どもができるはずもありません。ところが主は——旅人の一人は主ご自身だったのです——わたしたちの心をとがめて言われました。

「主にとって不可能なことがあろうか。私があるあなたのところに戻って来る来年の今頃には、サラに男の子が生まれている。」 17:14

心の中まで見通される神は怖い方です。

その人たちはソドムのほうに向かって出発しました。わたしは彼らを見送るためにしばらく一緒に行きました。すると主は言われました。

「私は、これから行おうとしていることをアブラハムに隠しておいてよいだろうか。アブラハムは必ずや大いなる強い国民となり、地上のすべての国民は彼によって祝福される。私がアブラハムを選んだのは、彼がその子らとその後に続く家族の者たちに命じて、

彼らが正義と公正を行い、主の道を守るようにするためであり、主がアブラハムに約束されたことを成就するためである。」 18:18-20

正義と公正を行い、主の道を守って生きることこそが、わたしの使命であり、わたしに続く者たちの使命です。これを行うことによって、主の祝福はわたしたちをとおして世界に広がる。その道を踏み外すなら、自分の祝福も世界の祝福も損なってしまう。繰り返し心に刻んで、そのように歩まなければなりません。

ソドムの滅亡

さらに主は言われました。

「ソドムとゴモラの叫びは実に大きく、その罪は極めて重い。さあ、私は降って行って、私に届いた叫びのとおり、彼らが確かに行っているのかどうか見て確かめよう。」
18:20-21

主はソドムとゴモラの町を、その悪のゆえに滅ぼそうとしておられる。ソドムにはあの甥のロトが暮らしているのです。わたしは主の前に立ちふさがるようにして言いました。

「あなたは本当に、正しい者を悪い者と共に滅ぼされるのですか。もしかすると、あの町の中には正しい人が五十人いるかもしれません。その中に五十人の正しい人がいても、その町を赦さず、本当に滅ぼされるのでしょうか。」 18:25

「もしソドムの町の中に五十人の正しい者がいるなら、その者のために、その町全体を赦すことにしよう。」 18:26

わたしは訴えました。「もし 50 人に一人足りないなら……」、「40 人しかいないなら……」。30 人、20 人……。最後にわたしは言いました。

「わが主よ、もう一度だけ申し上げても、どうかお怒りになりませんように。もしかすると、そこには十人しかいないかもしれません。」 18:32

すると主は答えられました。

「その十人のために、私は滅ぼしはしない。」 18:32

このようにわたしはロトとソドムの救いのために主にすがって訴えたのです。

主は去って行かれました。わたしは自分の住まいに帰って行きました。ロトのことが心配で、はらわたがちぎれるようでした。

主は、天から硫黄と火を降らせ、ソドムとゴモラを滅ぼされました。そちらを見下ろしてみると、地の煙が、まるでかまどの煙のように立ち上がっていました。

その中から、主はロトを救出してくださいました。

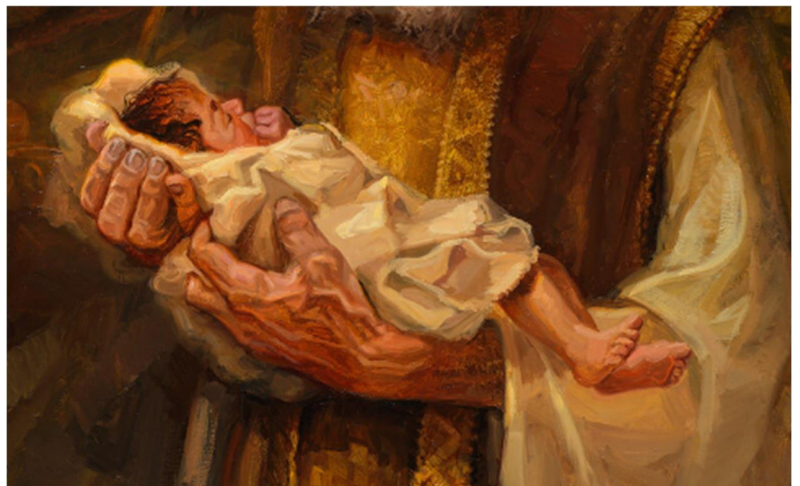
イサクの誕生

それからしばらくしてサラは身ごもり、やがて男の子を産みました。わたしはその子を「イサク」（笑い）と名付けました。サラは言いました。

「神は私を笑わせてくださいました。このことを聞く人は皆、私を笑うでしょう。」

21:6

一家に喜びの笑いが満ちました。妻の笑顔を見て、あのエジプトでのこと以来、わたしの心にも妻の心にもわだかまっていたものが解消された気がしました。



神は長い時間をかけて約束を実行される。たとえ沈黙しておられ

るように思えることがあったとしても、その間も見守りつづけておられる。わたしたちの生涯全体を包んで、守り導いてくださる。早まって絶望したり、投げやりになってはいけない。信頼して神に従おう、とあらためて決意しました。わたしは 100 歳、妻サラは 90 歳。感謝のうちに与えられた教訓でした。

(つづく)

(2023/8/22 井田 泉)